



TITLE:

ジイドとフランス経済学

AUTHOR(S):

堀, 新一

CITATION:

堀, 新一. ジイドとフランス経済学. 経済論叢 1957, 80(4): 503-523

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132567>

RIGHT:

經濟論叢

第八十卷 第四號

神戸正雄博士
八十歳祝賀
記念論文集

昭和三十二年十月

京都大學經濟學會

ジイドとフランス経済学

堀 新 一

シャルル・ジイド (Charles Gide, 1847-1932) の「経済原論」(Principes d'économie politique, vingt-sixième édition, Librairie de Recueil Sirey, Paris, 1931) を最近再読する機会があった。この Cours d'économie politique, 1931 並に Histoire des Doctrines économiques depuis les Physicrètes jusqu'à nos jours, 1926 を併読して、兼々私の考えているフランス経済学の特徴がジイドの中に如何に現れているかを眺めてみることにした。フランス経済学の特徴はセイ・バस्ताなどにその典型的な姿を見出し、大学派 (Université) の一人たるジイドはどちらかといえば若い時からのキリスト教的素養や古典学派の影響のほか歴史学派や社会主義の影響も受け、従ってフランス派の特徴は必ずしもその儘の形では受継がれていないともみられるが、これは狭い考え方で、社会主義でもフランスでは大資本の国イギリスなどとは異り理想的社会主義や小ブルジョア的社會主義の形を採り、歴史学派でもロマン主義の一面技術面の一大進歩に期待するなど、とかく現実を基礎としながらもその動きと掛け離れたものとなり勝ちで、ジイドにはセイ・バチスア以来のスミス学説をフランス化——俗派化して受け入れた面よりもより広いフランス的なものが窺われ、特に彼のフランス学界での活躍は十九世紀後半から二十世紀の前半にまたがる八十六年の生涯の大部分であり、その勤めていたのはパリ大学とかコレジ・ド・フランスなどフランスで歴史も古く学問の中心をなす大学で、最近のフランス学界の動きは一応ジイドに焦点的地位を見出すといつても過言でなく、その活躍部面も社会科学各方面に亘り、各派の主張を自己の中に消化し採り入れている関係で、経済学のフランス的のものが如何に彼の中に残留するかを研究するはフランス思想の発展を知る上に重要な意義あるは失わない。

私はフランスの経済学に就いては愛知学院大学論議 (一九五七年第五号) の拙稿「フランス経済学序説」並に名城商学の「イ

ギリス経済学の移入とフランス経済学、上」(昭三二、九月号)にその特質に就いて知れ、フランス社会主義に就いても追て論述する予定であるが、ここでは主として古典学派のフランス化を中心にジイドの経済学を研究したい。

一

フランス学派(*l'école française*)とかイギリス学派(*l'école anglaise*)とかフランス経済学(*l'économie politique française*)イギリス経済学(*l'économie politique anglaise*)という言葉は、われらの経済書で屢々みるところであり、例えばジイドのリスト(*Ch. Rist*)との共著の「学説史」をみても、スミスの経済学はセイ以降はフランス派はリカルドオやマルサスのイギリス派と異る道を歩んだことが自由学派を扱う冒頭にみえて居り、マルサスの「経済学批判」などにもフランス経済学とイギリス経済学の対照はボアギューベール(*Boigüellebert*)とペティ(*Petty*)に始まりシスモンディ(*Simondi*)とリカルドオを以て最後となっていることを述べているが、前者ではこの分離がセイとリカルドオを以て始まり後者ではかかる国民的対照はシスモンディとリカルドオを以て終り、以降は資本主義の弁護か否定かの経済学におき代ったとするものの、いずれにしても他国の経済学と区別せらるべき学派や思想の相違の背後にあつて共通の糸でこれを結びつけるフランス経済学とでも云うべき範疇の存在は認めるといへよう。では従来このフランス経済学といわれてきたものはどんな性格をもつた経済学であらうか。

フランス思想にはこれを方法からみればデカルトの二元論が一貫して流れている。³⁾ クレエル(*claire*)を尊ぶフランス経済学では形式論理以外の世界を持たない。相対立するものが一つの思想のなかに並んで存在しても交錯することはない。つまり $A = A + nonA$ の形式を一步も出るものではなく、 $A \neq A$ 又は $A \neq nonA$ などの面は彼等には

見逃された世界で、お隣のヘーゲル弁証法を育てたドイツ思想の方法とは自ら異なるものがあつた。フランス経済学では二つの対立する思想を一つの思想に止揚する流動的弁証法的の面が関心を持たれることドイツ派イギリス派に比し少かつたのもこの点からきていよう。強い直観力を持つフランス人はデカルトと共にわれあり、このわれとは考えるわれであることに気付き、一方に延長の面が、物質の面が、他方に思惟の面が、人間精神の内的省察としての心理的分析の面が展開されたが、この双方は互に相侵すべきでないとの原則のもとに研究が進められた。フランス思想が物質と精神という二つのモメントを提出しながらもこれを統一することを敢てせず、二重の二元論といわれるように完全無欠・全知全能の神に不完全の人間を対立せしめる如き⁵⁾、対立せるものの並立の特質は、経済学でも一つの結果に対する原因の説明に多元的方法を用い、延いては平面的な関係の説明を以て原因の探求に代える思想にも発展したのであり、矛盾に代えるに調和の思想を以てする如きもここに由来するといえよう。

第一にフランス派の方法は現実を尊ぶ。現実主義といつてもイギリスのそれと異り、より卒直な現物の直視という面もあり、フランス経済学が現物経済学といわれ、資本の如きも現物としての資本が重視され、セイの販路説の如き生産物は生産物と交換さるとの前提に立つ一般的恐慌の否定で、この点リカルドオが同じ結論を採るも資本の過剰の否定たると趣を異にする。価値や資本も労働一般とか生産費とか貨幣とか抽象的統一的な形で把握することはフランス派では敢てせない。ケネーの自然的秩序の思想の如きもその後永くフランスを支配した考えてあるが、これも自然界の調和を人間社会に及ぼした考えて現実を基調とし、これは普通抽象的のものと考えられる経済表でも同じである。

第二にフランス派の方法は人間の内的省察や心理的分析を尊ぶ。フランス経済学にして欲望を出発点とせないも

のはなく、人間心理の分析は微妙精巧を極めて居り、このことは同じ感覚論に立つもロックやヒュームのイギリス派をコンディアックのそれに対照せば容易に窺われ、イギリス派が労働や生産費を価値の基調とし、尺度とし、フランス派が物財に対する欲望の關係にこれを求める如きも両派の學問に対する出発点に由来する。この対立は同年に出たスミスの「国富論」とコンディアックの「商業と政治の相互關係」により愈々明かとなり、コンディアックはこの著書で交換相互剩説を展開し、交換者相互の心理的分析に深い省察を行っている。そしてこのコンディアックの基調は長くフランス派の出发点となつたが、これもフランス思想の一面を代表する考えて、フランス派が人間的といわれるはここにも由来する。

第三にフランス派は先述の意味での二元論を経済学でもその立論の基調としたが、人間の心理と云々い内的省察といつても人間のそれである以上延長を離れては考ええず、例えばジイドが欲望と労働を価値の出发点とするといつてもこの欲望は生理的要素に規定さるというから延長を外にすることはできず、延長と思惟の分離というデカルトの方法は経済学でもそのままの形で長く維持できなかったが、然し私がフランス派の支柱とする人間社会を自然界同様に率しようとの自然的秩序の思想が、欲望中心の主観的価値観と共に永くフランス経済学をして、社会形態の動きに關係ない非流動的な非歴史的な万古不易の経済学を重視しこれを目標とせしめることとなつたことは否定できない。少くもこの点では相離れたこの二つの思想は共通の目標に協力するものといえよう。

- (1) Gide et Rist, Histoire, cinquième édition, 1926, Paris, p. 377.
- (2) 経済学批判、安倍浩訳、春秋社大思想全集、七四頁。
- (3) 拙稿、フランス経済学序説、愛知学院大学論叢、一九五七年、一六八頁以下。

- (4) 沢潟久敬著、仏蘭西哲学研究、昭和二十二年、創元社、一八頁、一九頁。
(5) 淡野安太郎著、フランスの哲学、角川新書、昭和三十二年、五〇頁、五一頁。
(6) Cordillac, Commerce et le gouvernement considérés relativement l'un à l'autre, 1776.

二

右にフランス的なものは何か、フランス経済学はどんな方法に立つかの概要に触れたが進んでフランス経済学の特質とでもいへきものをその内容に即して更に一考してみたい。この点で注目すべきは、

第一にフランス経済学の背後には自然的秩序の支配の考え方がある。

自然的秩序とか自然法は人為的秩序・人定法に対立する考えて、自然界同様に人間社会にも神のつくった自然的秩序というものが支配し、フィジオクラート(Physiocrates)などの考えては、神は善をなすための存在だから、人間はこの自然的秩序に従う限り幸福で、これは人間の規範たるべき秩序であり、善であり、人為的秩序は自然的秩序を反映する限り人類は幸福であるが、この自然的秩序を人為的秩序に翻訳し、施行するのが専政君主で、後者は恣意的に統治するのでなく、何が自然的秩序かを民衆に教え、その支配の障害を除くことが主要任務で、ここにフランス派の自由放任論の基調があり、この自然的秩序を経済の後楯とするは永くフランス派に残った考え方である。ケネーなどではこの上に二重の自然主義といわれるように純収益は独り農業により土地から生まれる、商工業は不生産的であるとの主張が加わり、これは輸出自由なら多少餘剰を孕む農業国フランスの現実を一般化した考えて、ミスにより打破された思想であるが、自然が富を生産するとの考えも、セイ・バスター・ジイド等永くフラ

ンスに残り、スミスなどでも農業は商工業よりも生産的とみるなど完全には脱却していない。

ケネーは医者であっただけに、自然的秩序より脱線した不幸な社会を不健康として、これを健康体に対立せしめ治療を要すとみたが、ケネー始めセイやジイドなどの生理学としての経済学に基礎を与え、また経済学が個人間の富の生産・交換・分配というより時の政府への献言のための学問の形を採って発展したのもこれに基く。

自然的秩序は万古不易の秩序であり、固境もなく、経済とか政治とか道徳とかの縄張りもないが、フランス経済学はこれを基調とするだけに一種の社会学の性格をもち目的論的な要素も強く、全人類の立場からの見方が濃厚で、同じ自由放任論に疑問を持ってもシスモンディとドイツのF・リストでは議論の樹て方が違っている。

自然的秩序はフランス派では個人の活動を社会に結びつける糸であるが、この自然的秩序は嚴格に実現せねばならない秩序で、例えばスミスの自然価格のように自由主義のもとでは市場価格がこれをめぐり変動する中心価格で、こういう価格があるらしいという経験論からきたものでなく、ケネーの良価 (*bon prix*) は政府も個人も努力して必ず実現せねばならない唯一の価格で、ケネーでは価格は需要と生産物の量で定まるが、政府は農産物ではこの価格を生産費に当る根本価格と純収益を含んだ良価に落着けるよう施策せよ、施策といっても当時のフランスでは自由放任がこれが実現の最良の道とみたのであって、良価は自由放任の結果落着く価格でありまた規範の価格でもあり、これは生産者にも消費者にも最良の価格で、一部の人の言うように「一般的状态」³⁾ というような生やさしいものでなく、唯一の一義的に定まった目標で、スミスのようにあれこれの道を歩んだ後に結局は到達する、よしそれに至らずとも次善的なものでよいと言うのでなく、訓練ある理性に沿った利己心に導かれ始めて到達できる一本道であり、一般的状态などの考えは自然的秩序を背景としクレエルを尊ぶフランス派にはなく、フランス派の経済学

の背後には永くこの自然的秩序の思想がまた支配する。

第二にフランス経済学は調和的であり楽天主義的である。

楽天主義(Optimisme)が人類の物質生活への樂觀状態としても人類社会という広い立場からと現実の社会を前提としてのそれとは異り、物質生活の幸福といつても全人類のそれと一部の人々の幸福もあり、また内容も生産・分配・消費のそれで夫々異なる概念であるが、フランス派はこの点いとも簡単に片付け、自然的秩序は神のつくつたもので、神は人類の幸福のための存在で、この秩序にさへ従えば矛盾や不幸などなく、若しこれありとせばこの秩序の脱線の報いてあり、個々の人間の行動はこの秩序の支配のもとでは全体の調和へ向うべく運命づけられている。人類社会は一つで終末はなく階級の対立、生産・分配・消費の対立などはないとする。調和を出発点とするフランス派は矛盾を出発点とするマルクス派とまさに対蹠的であるが、これも見方の違いで、ケネーの経済表の調和の背後には更に広い不調和とか擾亂の面があり、マルクスでもその再生産表式を抽象的靜的にみれば調和以外のものはなく、これを發展的な具體的社会に当てはめるとき不調和が現れてくるが、フランス派では靜的な調和の面からのみ之を眺めようとした。もともと調和は、二者択一的で対立し一は他の犠牲により發展するというのでなく、相互依存・相互連帶の思想を背景とし、フランス派の自然的秩序は調和に通じ、調和は人間の幸福に通ずる。フランス派ではセイの販路説にみるよう一業の繁栄は他業の繁栄を齎らし、生産物の総価値は地主・労働者・資本家など生産要素提供者に分配され、各国は一国の如く共存共栄のもとにある。生産物は増産一本で販路は自ら開かれ、リカルドオのようにその市場論でも資本の移動を前提とする調和たる必要はないなども前者では自然的秩序の保証が前提となる。イギリス派ではスミスの自然価格論でも必ずこれが実現されるというのでなく最善とも言っていない。

リカルドオの分配論では労賃と利潤やこれらと地代は常に相対立し、マルサスは食料品の人口を養いえざるを説くが、フランス派では夫々のモメントの対立する如きは考えず、生産論のみならず分配論に迄も樂觀説を展開した。経済調和論 (Harmonies économiques, 1850, 3^eed. revue et augmentée, Paris, 1855) の著者フレデリック・バステアの如きはかかるフランス調和論の代表者であるが、彼は技術の進歩により経済価値に關係ある有價的部分は減少し、万人共有の自然的富の部分は増大し、遂には共產主義社会に至るべきを予想し、チュルゴー以来の利率低下もこれを資本の分け前の率の減少として、反対に労働者の分け前は益々増加するものとし、リカルドオの憂えた地代の増加の如きも優良地は節約される労苦多く、与えるサーヴィスの大なるため報酬は大なるも、技術の進歩はよくこの労苦を克服し地代を低下せしめるとみる。

フランス派の自然的秩序を背景とした自由主義は調和に通じ、人類の幸福に通ずるとのテーゼも現実の中に現れてきた矛盾は否定できず、初めは自由主義の不徹底で説明したが、なかにはジイドやユウエ (Caix) のように自由主義の短所を国家や組合の手で是正し、一段高い調和への道を考えるものも現れた。調和が人類の幸福に通ずる面もシスモンディの憧れた小生産の社会への逃避による調和では果してこれが人類への幸福として樂天しえるかどうかは疑問であるが、いずれにしても調和への欲求はフランス派の特質である。シスモンディの行き方をとらず技術の進歩による人類の幸福を期待する思想も早くからあり、コンドルセイ (Condorcet) の如きは不死の社会をさへ夢み、マルサスは「人口論」を著しこれが反駁にあてており、バステアや現在の「一九六〇年の世界」の著者等にも同じ樂天的考えがみえているが、彼等では資本主義社会が否定されこの新しい社会が来るというのではなく、資本主義下での發展で飽く迄も同じ原理のものの量的な發展の結果たる将来社会であり、これが結局は原理的に異

るものへの発展を齎らず面には飽く迄も気づかなかった。

自然的秩序も初めはあるべき社会であり、所与の社会批判のための原理であつたが、セイ・バスキア以降は現実にあるものが自然的秩序を反映する最良の社会とみ、他の反対学説に対し専ら弁護の立場に陥り、結局資本主義擁護論となり、俗流化したものの、その欠点が露骨化せないケネー時代なら兎に角、既に各方面に矛盾が現れても矛盾は調和の一面として現実を正視するを多くのフランス派の人々に妨げたものは尚彼等のなかの自然的秩序への信念であり、希望であつたことも否定できないところであろう。

第三にフランス経済学は主観価値説の基調に立ちまた消費者の経済学である。

フランス経済学は欲望を中心とする価値観に立つ経済学で、この点労働とか生産費に立つ価値観のイギリス経済学と異り、フランス派では価値は力 (*force, vigueur*) とか比較であるが、何の比較かと云えば欲望を満す性質即ち効用の比較であつて、効用、価値、富、使用価値、交換価値は同じ基調に立ち、交換価値は使用価値を社会全体からみたものでその平均で、いずれも物財に対する欲望に関連し、質的に異なるものではない。勿論主観価値といつても稀少性や交換可能性も価値の条件として認めるが、これを欲望価値説の中に解消し、労働の如きも欲望を満すこと大なるゆゑ大なる労働が費されるものとした。労働といつてもフランス派では物質生産の肉体労働のみでなく、発明労働、企業者の指揮監督や地主の労働なども含み、自然の労働も入り、多くは努力とか緊張とか労苦とか犠牲に当る主観的言葉を使い、寧ろサーヴィスとか寄与の意味で、従つて社会的平均労働の概念からは遠く、分配論でもかかる雑多な寄与を分配の基礎と考えた。

フランス経済学は消費者の立場からみた経済学であり、消費者本位の経済学でもある。フランス経済学ではその

目標は飽く迄も享樂品たる生産物の豊富であり、資本のための生産ではなく、高価の必要を説く場合もこれが生産者を刺戟し享樂品の豊富に連るとみたからで、究極の目標は消費者の側にあり、バスチアが死の床で経済学は消費者の立場から眺むべきを門弟に説いた^の如きも、フランス派の行き方をよく現しており、これはイギリス経済学が供給者の経済学、生産者の経済学、商人の経済学といわれるのと趣を異にする。フランス経済書の多くは欲望に出發し、最後に消費論が加えられているのも目標たる消費の重視を物語り、その見方は調和的で全人類の立場が主となり些々たる社会形態に捉われぬ万古不易の面が着目され、目的論的倫理的 성격が強く、厚生経済学の色彩が強いのもここより来る一面でもあろう。フランス派では生産論でも永く單純再生産の範疇に留まり、この生産は消費に連るからで、フランスでは早くから奢侈や公課が経済学の好題目となり、国内商業が外国貿易より重視されたのも、貨幣論や貿易論が経済学誕生期より論題となり欲望でなく貨幣が経済の動力と考えられた大生産工場の国イギリス等と異るところである。

第四にフランス経済学は自給自足の経済学であり、中産階級の経済学であり金利生活者の経済学である。

フランスは農業国で、自給自足の国で、十九世紀中半までは住民の八割は農民であり、外国貿易よりも国内商業に関心を持たれ、その経済学でも交換論や流通論は軽視されセイの経済学の如きも流通論を持たず、またケネー以来終始一貫農業の重視が説かれた。

また中産階級が数的にも総生産量でも多く、屢々の革命は中産階級の勝利に帰し、フランス工業は産業を支配せないだけに労資の対立は尖鋭化せず、社会主義でも大資本への抗争とかスミスやリカルドオの如き大資本の原理を理解しての上のそれではなく、空想社会主義や小ブルジョア社会主義に走り、イギリス古典学派もフランス化して移入

された。もともとフランスでは工業といつても構成は織物、葡萄酒など消費資料部門の軽工業が多く、消費論が経済学の中心となるのもかかる生産上の特殊事情にも由来した。

フランスでは資本主義の相当進んでのちも金利生活者が貴族、地主に代り支配的であるが、生産や貿易から遊離され一定の所得で生活する關係で、一定の所得をどう使うかが切実の問題で、経済学が消費中心に考えられ、主観価値説が発達したのもこの間の事情を反映し、生産から遊離されているから労資の対立に直面せず、社会主義が空想化し、資本主義の現実を謳歌する調和論が支配的となり国民の関心は国社債の利子や取引所投機に向けられた。レーニンの如きもイギリスの帝国主義は植民地帝国主義フランスのそれは高利貸帝国主義といっているが、フランス経済学で資本家と企業家が区別され、企業者利得が利潤の一般的形態となっている如きもこのフランスの現実の反映といえよう。

以上私はフランス経済学の特徴とても云うべきものを指摘してきたが、次にフランス派のかかる特質を最近まで留めた代表的の人とてもいうべきシャルル・ジイドの経済学に就いてこの私のみるフランス思想がどんな形で現れているかを吟味しよう。

- (1) 拙著、価値学説の展開と商業論、第二章。
- (2) 拙稿、フランス経済学序説、前掲、二九頁。
- (3) 久保田明光著、ケネー研究、時潮社、昭和三十年、第九章。
- (4) 拙著、市場論、第七章、第八章。
- (5) 拙著、市場論、第三章。
- (6) 前田貞次郎訳、コンドルセ、人間精神進歩の歴史、創元社、昭和二十四年、三二一頁。

- (7) Jean Fourastier, *La Civilisation de 1960*, 1960.
- (8) 拙稿「フランス経済学に於ける価値論の主観性」財政、第六卷、第七号。
- (9) *Guide, Histoire*, p. 403.
- (10) 帝國主義論、青野季吉訳、春秋社世界大思想全集、三十卷、六三頁。

三

ジイド経済学を既述の三著に就いて窺うこととするが、ここでは主として生前の最終版たる一九三二年版（第二十六版）の「経済原論」(Principes d'économie politique)を中心とする。

この書の構成は、

一九三一年版は主として総論、第一章経済科学、第二章経済学の諸学派、第三章欲望と価値となっているが、いま十年前の飯島囁司氏の訳本の台本たる一九二〇年版と比較すると後書のキリスト教社会改良主義とソリダリズムの項が除かれ、価値論には労働説効用説のほか折衷説が加わる。第一編生産論は第一部生産要素、第一章自然、第二章労働、第三章資本、第二部生産組織は第一章生産の自然的組織、第二章生産の人為的組織で、旧版に比し自然から原料の項が、労働からは労働の構成要素としての苦痛、有用年輪の項が除かれ、資本の項に資本主義が入り、生産組織では生産の合理化なる一項が入り、従来の労働の科学管理、標準化、地方化の問題が一括扱われる。第二編流通論は第一章交換、第二章金属貨幣、第三章紙幣、第四章各種信用形態、第五章信用操作、第六章価格変動、第七章外国貿易で、金属貨幣の項では第一次世界戦争前後の貨幣制度の歴史が紙幣の項では濫発が加わり、銀行論は信用操作の中に入り、価格変動が独立して一章となり、従来の国際貿易と商業政策が合して第七章となる。戦後のインフレや通貨処理の問題もでくる。第三編分配論は第一部分分配の各姿態、第一章現在の姿態、第二章社会主義の姿態、第二部分配受益者の各種類、第一章地主、第二章投資資本家、第三章賃銀労働者、第四章企業者で、社会主義分配は社会主義、集産主義、協同主義に三分し、賃銀制度は一番多くの入替と追加が行われ、賃銀制度のほか、労働者の要求として、同盟罷業や

労働時間や社会保障や国際立法等々の問題が整理され一頂となつてゐるが、ジイドの関心の程もわかる。企業者では利潤率の項が加わる。第四編消費論は第一章支出、第二章節約となり旧版の生産は消費を満すに足るかとかマルサスの人口論が削られ、支出では住宅、消費信用、浪費が加わり、貯蓄では誰が投資するか、貯蓄を容易にする制度が加わつてゐる。一九二〇年といへばジイドは七十四歳であるが、老齢に負けず爾後十一年、時代のセンスをその研究に反映させていることが以上の編・章の整理増加の中にも十分窺われる。

ジイドは経済学の目的を社会生活を営む人間の諸關係のなかに物質的欲求充足の關係、厚生に關する關係を扱うものとし、人体の生理學のように社会体を研究するにあるが、これを事物の性質を研究する純粹經濟學と人間相互の間につくつた任意的關係を研究する社會經濟學に分け、彼の經濟學はこの両面をもつものとし、出発点を人間の欲望に採り、欲望こそ總ての經濟活動の推進力とし、欲望の性質を分析し、數的無限・消化力の有限・選一的・協力的・習慣的なりとみ、最終効用・交換價值・實などの説明に入り、いずれも物財に対する欲望に關連するもので、個人間の使用價值よりも一國又は全世界の欲望・欲求で定まる交換價值を重視する。ジイドが個人の欲望から出発し、社會經濟を説き交換價值を説くことは個人から社會への飛躍であるが、特に自然法を事物本来の性質以上のものではなく、人類はこれを変ええるとして人為的秩序を重視するジイドでは個人をどうして社會に結ぶかは明かでない。ジイドは價值を比較と解し、この原因並に決定には効用と労働の二つのモメントを提出するが、價值がこのいづれか一方で定まらねばならない理由はないとし、この二つのモメントの均衡を説き、この両者は電氣の兩極のやうなもので、一方は陰極一方は陽極で、その間に発する火花が價值であるとする。ジイドでは欲望を基調とする價值論で労働説も限界効用説も一方的には認めないが、「原論」の版の進むにつれ労働説への非難も緩和され、最終版ではただマルサスの社会的平均労働は徐々に變化すべきに價值の變動は頻繁であり、労働により決定される價值

などは実現されない価値であり在庫中に価値の増す葡萄酒等には適用されないとする³⁾。限界効用説も評價の技巧にしても、価格決定の機構としては漸次好意を寄せる。彼の価格論は市場価格論が中心であるが、一物一価の法則と需要量供給量の合致する点なることのほか最大多数の売手買手に満足を与える価格としてオーストリア学派の限界対隅の理論を挙げてきたが、最近版では後の点は、市場の全部の商品の売捌きえるそれに倣え第二の法則に含める⁴⁾。然し結局は価格を生産費に落着けるものを競争に求め、競争の不完全なところに企業者利得を見出すなどはマール・カンチリズムの売渡利潤説に近く、貨幣数量説の如きも否定せず、突発的な価格変動や過去並に将来の長期変動には当てはまるとみる⁵⁾。独占価格論はクウルノオを一步もでない。

生産論はセイに似て、生産要素に自然・労働・資本をあげ、企業者はこれらを結合して生産を行うとするはスミスの構成価値説の展開であるが、セイは資本を最重視するに對し、ジイドは労働・土地・資本の順位に考える。然し労働といつても肉体労働のみでなく、發明労働・指揮労働も含み、ジイドでは運輸・商業・自由職業も生産的で、商業は無用のものを有用ならしめるとするが、これは労働が売りうべき商品に固着するを以て商業を生産的としたスミスに比し一步主観説に徹し⁶⁾、「講義」(Cours)をみると百貨店の一章が生産論に設けられているが、百貨店も彼では生産事業だから不思議はない。ではどこまでが生産的といえるか。彼では「欲望を満足させる限界内ですべての職業は有用で寄生物になり下れば有害となる。だから各職業団の定数と満足する欲望の重要性の間に正しい比例がなければならない⁷⁾」。どんな職業でも生産的だが、数が多くなると不生産的となるといふのである。尤もジイドでは労働だけで生産を行うのでなく、自然も労働に次ぐ重要な生産要素で、土地や自然力を啓発する動力・機械などを挙げるが、後年ロシアのツガン・バラノフスキーなど⁸⁾機械も剰余価値をつくるというのと同じ考え方で、

これは資本家の目に写ったそのままの姿で、フランス派の現実主義の一面でもあらう。機械の利害についてはパスチアとは違い社会に有利な面のみはみないが、混乱は一時的なもので安定期の来るを予想する。収獲通減の法則は凡ゆる産業に認めえるとし、旧版ではマルサス人口論がこれに関連し消費論で扱われているが、自然の供与する財の種類は無限であり、性本能と産児の欲望は区別すべく、出生率は富裕階級・民主的社会により小なりとの説を以て反駁する。資本は所得を生むための先在的富と解し、この所得が本来は労働で生まれるは感付いておるらしく、資本を二次的生産要素とみ、資本の成立には消極的な節約説を排し、消費に対する生産の超過に求め、従つて生産過剰などは社会体に生氣ある表徴で病的現象ならずとみる。彼は恐慌の原因に多元説を採り、過剰生産・労働者の消費不足・過剰資本化・生産不足を挙げ、対策はその原因により異とするも、恐慌を資本制生産の矛盾に由来するとか資本の崩壊に連るなどは没頭考えず、生物体に起る自然現象に擬え、そのままでも回復し、またカルテル・トラストなどでも除きえるとみた。また彼は恐慌を工業に特殊現象とみる。ジイドは資本を大体現物形態としてのそれに用い、新生産物をつくるための生産資本 (*les capitaux productives*) と社会の生産増加に関係ないが一定の社会では個人に所得を齎らす営利資本 (*les capitaux lucratifs*) に分け、同じ現物も用途により資本か否か定まるとしつつも、貨幣は車輛同様生産資本とみる矛盾を犯している。企業家は一定の組織のもとに土地・労働・資本を結合し生産に当るが、ジイドは産業集中の法則が無限に行われるとはみず、パリのルウヴルやボンマルシェの如きも一定限度以上は却つて経費も増し、既に静止状態にありとし、百貨店は嗜好品を得意とするも菓子店の如きは百貨店近傍でも立行くとして社会分業を暗示し、会社組織の発展を株式の分散による小財産分散に通ずるとみて歓迎し、新に設けた産業合理化の項ではカルテル・トラストにも不合理企業の排除・生産費引下・生産と消費の適合で

自由競争の粗悪品の多く経費高を齎らし不道漢に都合よいに比し、社会的利点多きを認めるが、これは彼が企業結合も組合の一種とみるためて、消費者への圧迫は消費者もこれに対し消費組合の結成を急げといっているのは両者に差別を認めていないことがわかる。

セイは生産・分配・消費の三部門分けだったが、ジイドも流通論は本来生産論に入るべきを認めながらも、独立の一編として扱い、内容には交換論・貨幣論・信用論・価格変動論・國際貿易論を扱い、交換論では等値交換論のセイやデュノアイエ(Dunoyer)と異り、交換が無用の富や人や生産能力を有用にするから生産的なるを認め、貨幣論ではその価値の根拠を交換の欲望を満すこと、紙幣はその価値は法律により与えられたものとする。信用は現在の富と将来の富の交換で、交換の拡張であり、現在の資本をよりよく利用せしむるものとするが新資本の創造とはみない。然し信用の行きつくところ貨幣も信用証券も介入せない物々交換を予想する。國際貿易論では旧版を代替え輸出の利益を輸入の先におき、前者の項目を増し、自発的な一國經濟の發展に資し、市場を駆け、生産費を下げ、無用の富を有用にし、金の流入・利潤獲得に資するものとするは、時勢の変化に適応したもので、ジイドの國民主義保護主義への移行ともみられるが、その挙げるところは使用価値的利益と利潤の見地の雑炊である。資本輸出でも資本の一定段階の事象としては扱わない、ただ資本移動の頻繁化のため一單位の労働量の二單位のそれとの交換を肯定する生産費説の当てはまらぬこと、國際間の取引も個人間のそれに類似してくるを指摘する。商業政策では彼の協同組合主義より条約制度(Le régime de traite)¹²⁾を推奨し、商業同盟・關稅同盟に期待し、競争止揚の意味からカルテル的な國際的契約も退けない。セイが外國貿易は國內商業に比し量的に少く一國の富裕に資するところ少しと輕くあしらうに比し進歩の跡もみらるるが、結局は生産費の問題よりも趣味や欲望充足が主となって

居るは両者変りない。

分配論でジイドは自然主義に協同組合主義 (cooperatism) を併置することにより調和を見出そうとする。社会の生産物は土地・労働・資本の寄与に応じ地主・賃銀労働者・投資資本家に分配されるとみるは所謂スミスの下グマに通ずる。ジイドは所有権の基礎を社会効用 (utilité sociale) に求め、社会的任務を果たすため支配し所分すべきを基調とし、共産主義・集産主義を不可とし、労働者・中産階級・農民・消費者総てに有利な協同組合主義を採り、ここでは所有権を認め、自由と個性を抑えない一方、中間的搾取を排除し、資本の指導的地位や利潤を退け資本主義企業に代置せんとするものであるが、生産が中心でなく消費を指導的地位に置かんとするに特質がある。地代論ではリカルドオの地代論を採り若い時代は土地国有論も唱え、地代や土地所有権の社会化に関心を持つ。ジイドの投資資本家は貨幣資本家よりも広く、利丁の概念も広いが、根拠には生産力説と時差説を挙げ、利子率では需要者側の限界企業の生産力を供給者側の節約能力・投資能力・安全度・貨幣量と対置し、利子率は資本需要の増大・危険率の大・資本の生産力の増大などもあり自然的には低下するものとみず、相互信用組織などで低下せしむべしとする。賃銀に就いてもその決定は需給の法則に支配されつつも、賃銀基金説・賃銀の鉄則・限界生産力説など多元説を採り、労働者側よりの自覚と組織を対置し、バスターアのように賃銀の自然的増加は認めず、生産力説を採るも地代・資本に対しての、公正賃銀の割前は算定できずとし、一種の勢力説の如きを採用。また地代・資本を一定とし生産された価値との差額を賃銀に与うべき暗示などもみえている。ジイドは賃銀の人為的引あげの可能を認めるから労働者の要求にも好意的で、協同組合主義での雇主の廃止・利潤の廃止・自分達のため働くとの観念を推奨する。¹⁵⁾ 企業者はセイではその労働には賃銀を割当て、生産費に入るが、ジイドでは企業者利得にこのほか独占的な好

条件を利用し、市価より高く売り又は生産費を低めることより来る超過の余剰を認めこれを利潤の一般の型とするも、利潤率は競争による薄利多売の傾向や国家や消費者からの対抗によつて低下する¹⁰⁾とみる。

消費論はジイド経済学の最後に置かれ、消費を欲望の満足と解する關係で欲望で出発したジイドの建前から肯ける点もあるが、注目すべきはジイドの経済学自体消費者の経済学であることと消費論そのものの内容の点で、前の点でジイドは生産は利害の対立に導かれ、消費は道徳的で将来の経済学編成の指針たるべきを説き、消費論の内容では支出と貯蓄の二章を設け、セイの含めた再生産的消費をこれは生産に外ならずとして退け、旧版のマルサスの人口論批判も省き、支出では消費組合のほか住宅組合・消費信用・奢侈と浪費を、節約では節約の施設や投資が加えられ投資は利他的で貯蓄は利己的とするは金利生活者の国柄を反映し、株式投資を推奨する如きも、株式を小財産の集中の形とみる結果でもあろう。ジイドは生産者の覇権の消費者に移る経済を期待し、消費組合を協同組合主義の中心に考える¹¹⁾。

- (1) Gide, *Principes d'économie politique*, 1931, p. 33.
- (2) Gide, *Principes*, p. 55.
- (3) Gide, *Principes*, p. 52.
- (4) Gide, *Principes*, p. 247.
- (5) Gide, *Principes*, p. 225.
- (6) Gide, *Principes*, p. 96.
- (7) Gide, *Principes*, p. 98.
- (8) 拙著『市場論』第七章。
- (9) Gide, *Principes*, p. 153, 154.

- (6) Gide, Principes, p. 185.
- (11) Gide, Principes, p. 265.
- (2) Gide, Principes, p. 385.
- (3) Gide, Principes, p. 450.
- (11) Gide, Principes, p. 499.
- (5) Gide, Principes, p. 598.
- (9) Gide, Principes, p. 615.
- (17) 拙稿、消費経済論の体系、財政、昭和十五年九月号。

四

以上ジイドの経済学を一九三一年版の「原論」を中心に概観してきたが、注目すべきは、

第一に欲望・消費の線を経済学を中心に考え、始めあり終りありでつじつまも合うが、生産された富が一路に消費に急ぐ以上再生産はどうして可能であるか。セイの再生産的消費を消費論より省くなどジイドでは特にこの感が深い。

第二に統一的な説明を避け価値の原因や大小の規定に効用説と労働説を並立させ、恐慌の原因にも各種の説を総て妥当として挙げ、利子などでも限界生産力説や時差説その他投資能力や危険など種々の原因を以て説明し帰一するところないが、これでは経済の推進力は何かは分らず、雑炊的なものとなり、遂には関係の叙述を以て説明に代えざるをえない。

第三に欲望を以て経済学の基調とする一方社会主義学派や歴史学派へも秋波を送るが、欲望がかかる発展的面にどう結びつくか、個人の欲望が社会の面にどう関連し、資本主義社会の変革にまで至るかとの結び方は明白でない。第四に自由主義や自然主義の一方に協同組合主義連帶主義や人為制度を認めようとし、後者では自由や個人的創意もと入れ、生産に代わるに消費の組合でこれを実現せんとするが、矛盾した凡ゆる要素の難居は分配論でも似通っており、バスターアのように自然的秩序の保証があればよいが、それが除かれたジイドとしてはどうしてその間の調節がとれ、どうしてかかる社会の招来を保証するかは明白でなく、無から有を生み出す空想性は免れず、一面には株式で小財産の協同を夢みる如きロマン主義の香りさえする。

ジイド経済学の性格は右の通りであるが、然らば既述のフランス的な考えはどの程度ジイドに窺われるか。

第一にジイドが説明に統一的要因を退けるはデカルト以来の多元論の方法に沿う。ジイドは「学説史」の冒頭で思想が環境に支配されるとの説を退け、同環境が異なる思想を生むことを述べているが、デカルトの延長と思维の区別の考え方もみられ、価値論に効用説と労働説を挙げ一方に帰一する必要なしという如きもフランス伝統の方法である。

第二に自然的秩序を退けつつもこれに由来する考え方はジイドにも残り、一人は全体のためという連帯思想 (solidarités) や土地・労働・資本の協力の生産物を地主・労働者・資本家に分つ生産論分配論や条約制度による貿易論、その他生物学的な社会観なども自然的秩序に端を発する。一方自然的秩序から離れたジイドの考えはいずれも失敗で、個人と社会の結び付きを失わせ、実現の保証もない対立を糊塗する協同組合主義など難炊的なものが生まれ、再生産の思想は欲望に始まり消費に終るジイド経済学では見逃されているなどこれである。

第三に樂天主義も、私益と公益の一致に疑問を持ち自由主義を協同組合主義に代えようとするジイドの中にもみられ、ジイドまたセイ、バスチアのフランス派がスミスをマルサス、リカルドオの暗い面に發展せしめなかったことに好意を寄せる。ジイドでは自然のままでも集中の法則に限界ありとし、恐慌は生命の発動力健康の表徴で自ら恢復するとする。分配論消費論で協同組合主義を對置するが、これも自由や個人的創意を認めるもので、自由主義の短所を補い調和主義の社会を実現せんとするもので、バスチアの共產主義を去ること遠いものではない。

第四に欲望中心の価値観もフランス派の伝統に沿い、ジイドでは交換価値や富も欲望を離れず、ただ欲望を中心としながら社会の動的面を採り入れようとしたところにフランス派からの隔離があるがジイドの矛盾もある。

第五に消費者本位の経済学もジイドをフランス派の代表者たらしめるもので、倫理的要素の強く、目的論的であり、階級対立を認めず、協調的なるもここに由来する。ジイドの協同組合主義は消費者を社会改良の中心とする。

第六にジイド経済学は中産階級の経済学であり金利生活者のそれ、協同組合主義が中産階級に目標を置くはジイド自身述べており、フリーエの組合も本質は同じで、また消費が生産手段に結びつく如きはシスモンディの小生産を連想せしめる。企業者の重視や心理価値説は金利生活者の国の経済学である。

第七に固定的非歴史の見方を棄てて歴史的流動的面を採り入れんとするの焦慮は現実の動きが従来のフランス派の説明は許されざるに至ったもので、而も消費とか協同主義とか何か安定せるものに憧れるは自然的秩序の伝統を一步押しなす。

(1) Gide, Histoire, p. XI.

——鈴鹿山麓北小松にて——